令和7年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【慈恩寺小学校】

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ 国語『主語と述語の関係を捉える問題』 算数『「数と計算」における小数の除法や四則混合の計算』 ＜指導上の課題＞ 学校課題研修を中心に授業研究を行い、児童が何を学ぶか、どのような力をつけるかを明確にする必要がある。	⇒	朝の短時間学習や授業の中で、プリントやドリルパーク等を用い、学習上課題の見られた問題の類似・過去問題の反復学習を重点的に取り組む【週1回】 学年・ブロックを中心に授業参観を定期的に行い、授業研究を進める。【学期1回】
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ 国語『書くこと』 算数『「図形」領域』 ＜指導上の課題＞ 各学年にみられる課題の改善に向け、学びのポイント「じ・し・ゃ・ク」を意識した授業展開が必要である。	⇒	様々な学習活動や学校行事等において、ねらいに応じてふりかえりを書く活動を設定し、取り組ませる。【各行事毎】 「自己の考えが伝わるよう適切な図表を用いて書き表し方を工夫する活動」に課題がみられたため、各教科で図表等の根拠資料をもとに自己の考えをまとめる活動に重点的に取り組む。【月1回】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語では、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことができるかどうかをみる問題に課題が見られる。問題文をよく読み、似たような選択肢から正答を見つけることに苦手意識があると考える。 算数では、台形の意味や性質について理解しているかどうかをみる問題に課題が見られることから、多角形の特徴を正しく理解することが必要だと考える。 理科では、氷がとけてできた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解しているかどうかをみる問題に課題が見られた。知識として獲得したものを自分なりにまとめること活動が必要である。
思考・判断・表現	国語では、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる問題に課題が見られたことから、普段から短い文章や日記等を書く活動が必要である。 算数では、伴って変わる2つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見いだし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる問題に課題が見られた。単純な計算問題だけでなく、複合的な問題にも取り組む機会を増やす必要がある。 理科では、発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる問題に課題が見られた。実験結果を自分の言葉で、思考ツール等を用い整理させることが必要である。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	朝の短時間学習や授業の中で、プリントやドリルパーク等を用い、学習の習熟を図った。習熟だけでなく昨年度までに課題の見られた類似・過去問題を学期末に重点的に取り組む学年も増えた。授業研究を進めることで、児童が身に付けるべき資質・能力への理解が深まりつつある。	見直しなし
思考・判断・表現	B	これまでに行った学習活動や学校行事等において、ねらいに応じてふりかえりを書く活動を設定し、取り組ませた。またSSDBも活用し、記録として残すようにしている。昨年度、課題が見られた内容の改善のため、各教科で図表等の根拠資料をもとに自己の考えをまとめる活動に重点的に取り組んだ。	見直しなし

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」において、複数の学年で課題が見られた。特に、当該学年より前の学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく使うことが難しい状況がある。そのため、各学年において、意識的に漢字を使用する機会を設定することが急務である。 算数では、昨年度まで課題が見られた「数と計算」の領域について、全学年で正答率の上昇が見られた。これは、中学年以上で通年実施してきた少人数指導の成果であると考えられる。 社会では、どの学年においても課題が残った。特に「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」の領域で、資料の比較や変化の読み取り、グラフの理解、国土の自然災害の状況の把握に課題が見られた。資料を比較・検討し、関連付けられるような授業展開が求められる。 理科では、5年の「粒子」を柱とする領域、6年の「地球」を柱とする領域に課題が見られた。学習内容と日常生活を結びつけることで、理解をより深められると考えられる。
思考・判断・表現	国語では、全学年で表現力の伸び悩みが見られ、特に「読むこと」に課題があった。目的を意識した読み取りが十分にできず、中心となる語句や文を見つけること、文章と図表を結びつけて必要な情報を取り出すことの正答率が低い状況である。今後は、読みの目的を意識した授業展開をする等、工夫していく必要がある。 算数では、複数の学年で市平均正答率を上回ることができた。しかし、「データの活用」の領域では全学年に課題が見られた。グラフの読み取りや平均値の求め方など、基礎的な技能を確実に定着していくことが求められる。 社会では、どの学年においても課題が残った。特に「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」では、前学年までに学習した内容の正答率が低く、学びの系統性やつながりを十分に意識できていないことが明らかになった。既習事項を意識した指導の工夫が必要である。 理科では、5年の「地球」を柱とする領域、6年の「エネルギー」を柱とする領域に課題が見られた。日常生活における現象と学んだ内容とのつながりを理解できるよう、具体的な経験や事例を取り入れた授業が求められる。

⑤ 学力向上策の実施状況

	評価（※）	
知識・技能	B	授業の始めに行うミニプリントや、単元の終わりに取り組むドリルパークなど、習熟を図るための学習時間を確保する取り組みが教員の間で習慣化した。その結果、さいたま市学習状況調査において正答率が上昇した学年が複数見られた。 教員は学年の実態をの確に把握し、課題が見られる問題を意図的に作成したり、過去問題や「おかわRe:チャレンジ」に挑戦する場面を作ったりすることで、児童の習熟度を高めることができた。 また、授業後には児童がSSDBに学習の振り返りを入力する活動が習慣化し、児童は自分の学びをより具体的な言葉で表現できるようになった。教員は、その振り返りを基に児童の理解度を確認し、次時の授業へ活かすことができた。
思考・判断・表現	B	目的に応じた書く活動に通年で取り組んだ結果、さいたま市学習状況調査では、多くの学年で類似問題の正答率が昨年度より上昇した。また、同調査の質問項目「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していますか。」において、肯定的な回答は平均で約83%となった。これにより、児童が相手意識をもって表現しようとしていることが分かる。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と学力向上策

知識・技能	各学年における課題が明確になったため、課題克服に向けては、類似問題や過去問題に重点的に取り組むことで、児童の学習意識をさらに高めていきたい。 国語では、当該学年より前の学年別漢字配当表に示されている漢字の習熟に課題が見られた。これを改善するために、授業の導入で漢字の小テストを行うなど、継続的に習熟を図る取組が必要である。また、朝の短時間学習や授業内で重点的に漢字に取り組むことで、全学年において改善を図っていきたい。 算数では、引き続き学年の実態を把握しながら、中学年以上で少人数指導を継続して行っていく。少人数指導により、児童一人ひとりに応じた個別最適な学びを保障し、自分のペースで学習を進められる環境が整えられる。
思考・判断・表現	国語の「書くこと」については、今後もさまざまな学習活動や学校行事において、ねらいに応じて意図的に書く活動に取り組んでいきたい。特に高学年では、自分の考えを相手にわかりやすく伝えるために、適切な図表を用いて表現を工夫する活動に課題が見られた。そこで、教科横断的な視点を取り入れ、各教科の授業において図表などの根拠資料を基に自分の考えをまとめる活動を重視していきたい。 また、さいたま市学習状況調査で課題となった「データの活用」については、ドリルパークなどでの問題演習に加え、社会科や理科においてもグラフの読み取りを行う場面を多く設定する。これにより、教科横断的にデータを扱う力の向上を図り、資質・能力の育成をより一層推進していく。